

奥州藤原王国

と

源 義経



【奥州藤原王国物語】

蝦夷の国

古事記に見られる東北地方は、神話の時代のことと考えられますが、大和橿原（かしわら）の地で初代神武天皇が即位され、そこから数えて、第十代崇神天皇の御代（崇神天皇、BC30）、に成立していたヤマト政権の朝廷は、東北地方から九州までの服従を狙い、四道將軍を派遣し、従わない者は討伐すると記されている。

四道將軍の派遣先は、

- ① 大彦命（おおひこのみこと）北陸道
- ② 建沼河別命（たけぬなかわのみこと）——東海道
- ③ 吉備津彦命（きびつひこのみこと）——西道＝山陽道
- ④ 丹波道主命（たんばのみちぬしのみこと）——丹波＝山陰道

この中で、北陸道を進んでいった大彦命と東海道を征していった建沼河別命が会う

た場所があった。それが「会津」と記されている。これが東北方面についての初見で、既に二千年前にはヤマト政権下にこの地方は組み入れられていることが見受けられる。

第十二代景行天皇の御代には、九州、出雲を平定し帰還したばかりの皇子・日本武尊命を東征させる。日本武尊命は伊勢神宮へ参宮し、叔母である斎宮の倭媛命（やまとひめのみこと）を訪ね、倭媛命から「天叢雲剣」を拝領し、東海道を平定し北上、現在の焼津あたりで、奸計に逢い、草原の中で枯草に火を放たれピンチに陥る。

しかし、拝領した天叢雲剣で枯草を払えば、たちまち敵方に炎が巻き上がり、難を逃れこの地を平定に導いた。これらのことから、この土地を「焼津」と命名し、剣は「草薙剣」と名のこととなったのである。

そして三浦半島の走水（はしりみず）から房総に渡るとき、俄かに海上は荒れるも、弟橘媛命（おとたちばなひめのみこと）が海神に身を捧げることにより、無事、東征を続けることができ、常陸から武蔵、信州を通り尾張に至るのです。

しかし、尾張・伊吹山の悪霊退治に油断し敗れ身は憔悴し、「まほろばの大和」を目指す力が尽き、能褒野（のぼの）で崩御します。そして、白鳥となって飛び去っていくのです。

次に、第二十一代雄略天皇（ワカタケル大王）の御代には、武蔵国は完全にヤマト政権の統治下に置かれるようになります。

その証拠は現在の行田市に存在する「さきたま古墳群」のなかの稲荷山古墳から昭和四十三年（1968）出土した金象嵌の「稲荷山鉄剣」に見ることができるのです。鉄剣の表面に五十七文字、裏面には五十八文字があり、その銘文は、武蔵国の長「ワケの臣」が「ワカタケル大王」に仕えたところ。年代は「辛亥年」と刻印され、西暦四百七十一年と読み取られています。

また、明治6年（1873）には、熊本・江田船山古墳から出土された銀象嵌鉄剣にも、この地方の豪族が「ワカタケル大王」に仕えた」と解釈されている。

このような歴史的出土品から読み取れるのは5世紀に入ったころには、ヤマト政権の中央政権は関東から九州まで、その権力が完

全に及んできていることが読み取れるので
す。

多賀城の建設

大和では、天皇家を凌ぐ勢いの蘇我家より
政権の座を朝廷に取り戻そうと、第三十七
代斉明天皇の皇子・中大兄皇子と中臣鎌足ら
が宮中に於いて、権力者の蘇我入鹿を滅ぼし
【乙巳の変（いつしのへん^{いふ}年）

年）、朝廷に
政権を呼び戻すことに成功した。

その時、長年にわたり中国の文化や政治を
伝播し友好国であった朝鮮の百済国（くだら）
が中国・唐の支援を受けた高句麗に攻められ
存亡の危機に陥っていた。

この百済国を救うべく、ヤマト政権は大軍
を援軍として出すことに決定。高句麗・中国
唐の連合軍に「白村江（はくそんこう）の戦
（660年）」で対峙し戦いが始まるも壊滅的な
大敗を喫してしまう。

その後は大国・唐からの侵略の脅威を感じ、
大宰府を中心に瀬戸内海にかけて防御柵を
造ることとなった。しかし、中国の大唐の
皇帝内の内紛もありヤマト政権への侵略の
脅威は薄れていった。

ヤマト政権の政治体制は、中大兄皇子が第
三十八代天智天皇に践祚し、急ぎ中国の国家
体制を学び取り入れ大和政権の整備に取り
掛かりることとなった。それが近江令から始
まる律令国家（^{りきやうこくが}7世紀半ば）への建設
となっていく。

幸いにして、大国・唐からの侵略はなかつ
たが、同時に未開の東北地方を北方からの侵
略の脅威に備えて、律令国家の枠組みに入れ
ることが急務となった。さらには国家への調
（税金）の納入が図られることの政策を実行
していくのです。このように勢力の拡大と、
それに伴う防衛網も整備していくこととな
った。

そして、ヤマト政権は、未開の東北地方（蝦
夷の地）にも、中央政権の地方庁を設けるこ
ととし、北方の防衛も兼ね添えた「鎮守府」
兼「陸奥国」国府の多賀城（現宮城県多賀城
市）を設置することになったのです。

神亀元年（^{しんき}724）按察使・大野東人（おおの
あずまびと）のもとで建設が始まり、東北地
方の一大拠点とし、軍事力で蝦夷国（陸奥地
方）をヤマト政権（朝廷）の支配下に置こう
とする政策が着々と進められていくのであ

ります。

アテルイ（阿弭流為）の登場

中央政権が支配しようとする頃の蝦夷（え
みし）の地は、縄文文化の残る部族社会で、
族長のもとに百人くらいの共同体で、これが
各地に点在し、狩猟民族として狩、猟、稲作
などを「共同」で行い、争いのない暮らしを
していたようです。

ここに、律令国家（中央集権）による蝦夷
地の支配を目指すヤマト政権は軍事力と慰
撫（いぶ）を行使しながら、支配地を拡大し
ていったのです。

少しずつヤマト政権に恭順する族長・伊治
磐麻呂（これはりのあぎまろ）のような族長
もいる反面、中央政権の文化との違う、蝦夷
の地の文化を死守しようとする族長も現れ
てくる

それが、アテルイ（阿弭流為）であった。
従属させようとするヤマト政権に対し、
各地に分散していた村々をまとめ組織化
し「蝦夷連合」を作り、自分たちの権益を
守るため敢然とヤマト政権に対立姿勢を

とるのでした。

しかし、ヤマト政権の蝦夷人を慰撫すると同時に蔑視政策も見え隠れするのか、従属していた伊治砦麻呂が突如宝龜十一年(780)陸奥国府に反乱を起こし、按察使・鎮守副將軍紀広純(きのひろずみ)を殺害し、多賀城に火を放ち焼失させてしまうような大事件も発生するようになります。

しかし、その後、伊治砦麻呂の反乱は鎮圧されますが、各地でゲリラ的な蝦夷との交戦は止まず、蝦夷の地の戦いは泥沼化になっていった。

奈良時代の後期、延暦八年(789)第五十代桓武天皇は蝦夷の完全支配を目論見、紀古佐美(きのこさみ)を総大将として約一万の大軍を編成し鎮圧に向かわせるのです。

これに立ち向かうのがアテルイ(阿弭流為)軍千人でした。結果は、畿内とは全く気象条件などが違う地の利を巧みに生かしたアテルイ軍は、朝廷軍一万を翻弄し圧勝するのです。

朝廷軍は別將の丈部善理ら戦死者25人、矢にあたる者245人、川で溺死1036人、裸身で泳ぎ逃げる者127人など、この鎮圧

には大損害を被り大失敗に終わり、紀古佐美は京へ帰還し蝦夷征伐総大将を解任されるのです。

坂上田村麻呂の登場

その後、延暦十年(791)に大伴弟麻呂(おとものおとまろ)が征夷大使に叙任され、武官の坂上田村麻呂(さかのうえのたむらろ)を副將軍の一人として、ヤマト政権の蝦夷地攻略の指揮を任されることになっていくのです。

坂上田村麻呂は、蝦夷軍との戦いのこれまでの経緯を熟慮し軍制の改革、防具の強化など、兵士の質の強化を図っていった。

時は平安時代に入り、延暦十三年(794)二月、大伴弟麻呂、坂上田村麻呂は征夷に向けて出発。蝦夷地での戦いは、族長アテルイ率いる蝦夷軍の壊滅はできなかったが、戦果は「斬首457、捕虜150、獲馬85疋、」戦勝に近い戦果を以って、遷都されたばかりの平安京(京都)に凱旋し、天皇に節刀を返上し、大伴弟麻呂は征夷の功により従四位下に叙任された。

そして、坂上田村麻呂は、延暦十五年(796)に「陸奥出羽按察使兼陸奥守」に任命され、さらに鎮守府將軍も兼ねることとなった。

陸奥守・鎮守府將軍となった坂上田村麻呂は、延暦二十年(801)二月、征夷大將軍として節刀を賜り、軍勢4万、軍監5人、軍曹32人を率いて平安京を出征し征討に向かう。同年十月末、再びアテルイ軍と戦うが、壊滅までには至らなかったが、大方の「討伏」に成功し凱旋し、桓武天皇へ節刀を返上するのです。

アテルイ(阿弭流為)の降伏

坂上田村麻呂の征討の巧みさは朝廷に認知され延暦二十一年(802)二月、蝦夷地へ朝廷の權威と権力を顕わにするための拠点として「造陸奥国胆沢城使」に叙任され「胆沢城」を造営することとなった。再び、坂上田村麻呂は節刀を賜り、胆沢城造営使として「陸奥国」へと派遣された。

この造営は蝦夷の族長・アテルイとの和平交渉を重ねながら、工事は着々と進めていった。朝廷の權威と坂上田村麻呂の柔和策をも

つて、俘囚浪人4千人を胆沢城周辺に移住させることに成功し、「胆沢城」は着々と実質的に鎮守府の形を整えてきました。

同年五月、この胆沢城完成間近に、阿弼流為（アテルイ）と同僚の盤具母體（いわぐのもれ）は坂上田村麻呂の勢いに屈し、五百人の部下を率いて降伏してきました。

同年七月、坂上田村麻呂は阿弼流為（アテルイ）と盤具母體（いわぐのもれ）を引き連れ平安京に向かった。田村麻呂はこの族長二人には、朝廷のもとで蝦夷国の経営に当たらせようと考えていました。

京に着き、二人の族長の身柄は公卿の会議に計られますが、田村麻呂の期待も空しく、公卿会議の裁定では、両人は惨くも斬首と決定されてしまいます。

平安京遷都千二百年を記念した時（平成六年Ⅱ1994）坂上田村麻呂の創建と伝わる「清水寺」の境内に、阿弼流為（アテルイ）と盤具母體（いわぐのもれ）の慰霊碑が祀られました。

奥六郷の成立

阿弼流為（アテルイ）と盤具母體（いわぐのもれ）の降伏により、朝廷の蝦夷の支配地は拡大していった。

さらに、延暦二十二年（883）には志波城を造営する。そして、田村麻呂の亡き後には弘仁二年（811）から徐々に朝廷の支配地は拡大の傾向を強め、弘仁六年（815）代には、胆沢城は兵士400人、健士300人の計700人が60日或いは90日の交代制で、常時700人体制を維持し蝦夷地を防衛することとなった。

しかし、戦費の維持がかさむことから、以後、蝦夷に対し、慰撫政策を優先させ、俘囚長の任命などの融和策に切り替え、攻略は実施されなくなっていった。

その結果、時を経て西暦九百年代には、ヤマト政権の支配地は拡大され、「岩手、志和、婢抜、和賀、江刺、伊沢」（現在の青森県、岩手県、福島県）の広大な「奥六郷」が成立していったのである。

安部氏の抬頭

第四十五代聖武天皇の詔により、天平十五年「墾田永年私財法」（新開地された土地は私

有できる）が立法され、次第に新地が開墾され、賢い貴族、大寺社は開墾者から寄進を受け益々私有の土地は肥大化していく。これが荘園化の始まりとなっていくのです。

平安時代に入り、天皇を補佐する藤原摂関家は天皇家と姻戚関係を結び、次第に政治の独裁化を図っていくこととなります。

律令国家を進めてきた中央政権（朝廷）は人口の増加も手伝って様々な政策を打ち出すこととなります。摂関政治の打ち出した「不輸の権」（土地に関する法Ⅱ荘園の減税）も拍車をかけるように、西暦九百年代に入ると律令制度は自然崩壊していった。

この当時の土地に対する大きな事件は天慶三年（940）の「平将門事件」で、「新皇」を掲げ、筑波山一帯の常陸地方の独立を図った朝廷との戦いは壮絶を極め、歴史に残る大事件であった。

これらの事柄は、これから登場する奥六郷の俘囚長（俘囚の中から朝廷によって選出された有力者）安部一族も学習していたのではないだろうかと考えられるのです

安部氏の出自については確たるものは無いが、安部氏の家伝によれば、初代神武天皇に誅された「畿内の王・長脛彦（ながすねびこ）」の「兄・安日彦（あびひこ）」をその始祖とする説。或いは、安部忠良（生誕不詳）が、陸奥権守に任命され、息子ら一族郎党を連れて京都から陸奥国へ下向し、奥六郷に土着し、そして、その土地の俘囚を従わせ勢力を伸ばしていった「中央貴族出身」ではないかという説など学説が分かれています。

いずれにしても、陸奥守安部忠良の嫡男・安部頼時（？-1057）が奥六郷俘囚長となり、婚姻などで一族の勢力を拡大し、奥六郷を独立国のように統率していくのです。

鬼切部の戦い

安部頼時は、当初は朝廷を中央政府と認め、貢租（年貢）を納めていたのですが、次第に滞るようになっていくのです。この行為は貴族、或いは大寺社の荘園からは税金は免除されるという「不輸の権」を学びそして、その権利を主張したのかもしれませんが。

しかし、朝廷は安倍頼時が貢租を滞納するための理由で懲罰を課すために、永承六年（1057）、時の陸奥守・藤原登任（ふじわらのなりとう）と秋田城介・平重成とを朝廷は挙兵させ、討伐に向かわせます。

これを安部頼時が迎え打った場所は、玉造郡鬼切部（現在の宮城県大崎市鳴子温泉鬼首）なのです。

この戦いは、後に「鬼切部の戦い」と歴史上に称されますが、この戦いの結果は、安部頼時軍の大勝利に終わり、敗れた朝廷軍は膨大な戦死者を出し、藤原登任は解任され京に呼び戻されます。

源頼義の登場

この敗北を機会に、朝廷は陸奥守を公家ではなく、長元元年（1028）に起きた房総地方の「平忠常の乱」を戦うことなく鎮めた英雄、武勇の誉れ高い武家の河内源氏・源頼義を陸奥守に補任し、多賀城に着任させます。

頼義の陸奥守就任を怖れた安部頼時は、就任を祝い忠誠を誓い、さらに改名までします。実は、頼時の当時の名は頼良（よりよし）でしたが、源頼義と同じ読みのため、遠慮して

自ら改めたのです。

永承七年（1052）、後冷泉天皇の祖母・上東門院の病氣平癒の願いの大赦（たいしや）罪人の罪が減刑されること）が行われ、鬼切部で、朝廷軍を破った「安倍頼時」も恩赦を受けます。

一方、源頼義は武士の最高栄誉職の「鎮守府將軍」に叙され、陸奥国に置かれた鎮守府（軍政府）の長官にも就任します。

安倍頼時は、鎮守府將軍・源頼義に恭順の意を表し、少しばかりは平穏な日々が続いていましたが、源頼義の陸奥守の任期満了となる天喜四年（1056）に些細な讒言から争いになり、この讒言が原因となり、後世に「前九年の役」と言われる血みどろの戦いが始まっていくのです。

阿久利川事件

源頼義は陸奥守の任期が迫り、鎮守府（胆沢城）から国府（多賀城）に帰還中、阿久利川河畔に野営した際、頼義のもとに密使が訪れ、頼義の部下・藤原光貞が夜襲を受け人馬が殺害されたという事件があったことが告

げられた。

そこで頼義は光貞の報告を聞くと、光貞は「安倍頼時の嫡子・安部貞任が以前から自分の妹を妻にしたいと言ってきたが、卑しい俘囚にはやれぬと断ったことを恨みでの夜襲に違いない」と申し立てた。

それを聞いた頼義は、証拠の確証を得ぬまま、安倍頼時に息子の「貞任」を処罰しようと思いを固めますが、頼時は貞任を差し出すことを拒否してしまふ。さらに衣川関を閉じて頼義の多賀城への道も塞いでしまふのです。

このような一連の事件のため、頼義は安倍一族の討伐を朝廷に持ち込み、安倍頼時討伐の宣旨を拝戴し、実行に移すのです。ここからまた、奥六郷の安部一族と源頼義・義家との壮絶な戦いが勃発するのです。

藤原経清の登場

陸奥国の国司に仕えていた「藤原経清」は、元来源頼義の弟・源頼清の郎従で、頼清が陸奥守として長久年間（1040～1044）に多賀城に赴任した時下向してきたという。

そして、安倍頼時の娘・有加一乃末陪（あ

りかいちのまえ）を娶り、在庁官人として陸奥国府の多賀城に勤務していたようです。経清における資料は現存していないが陸奥権守従七位下に叙せられ、亘理郡（わたり、現宮城県亘理郡）を拝領し荘園経営を行うと同時に交通の要衝を支配し、そこを通過する者から交通税を課し財力を蓄えていたという。

阿久利川事件をきっかけに、安部頼時と源頼義の戦いが始まると、当初、経清は陸奥守頼義に従って朝廷軍として戦うが、経清と同じく安倍頼時の娘を妻に迎えて、源頼義に従っていた「平永衡」が謀反の疑い（甲冑を派手に纏い舅の安部頼時に朝廷軍の位置を知らせたという讒言による疑い）で頼義に討たれるという身に迫る事件が発生します。

これには、経清は、自分がいつ頼義に討たれるか分からない危機感を覚え、安倍頼時が多賀城奇襲するという噂を流し、頼義が急遽多賀城に引き返した時に、経清は兵八百を率いて、頼義軍から離反し、安部頼時の軍に合流していくのです。

安部頼時の死

源頼義の陸奥守任期が終わり、次の陸奥守には公家の藤原良綱（良経という説もある）に決まっていたのですが、しかし、阿久利川事件の報が京にも届くと、藤原良綱（良経）は陸奥守を辞退することになります。そこで朝廷は、頼義を再度、天喜五年（1056）陸奥守に任じることとなった。

再び、陸奥守として踏みとどまった源頼義軍と安部頼時軍の戦いは、またまた始まった。頼義軍は苦戦し一進一退の攻防戦が繰り広げられる中、頼義は津軽の俘囚で安部頼時の親族である「安部富忠（あべのとみただ）」を調略し、天喜五年（1057）五月、味方に引き入れることに成功した。

これに驚いた頼時は七月、富忠に思いとどまるよう説得のため、津軽に向かうが、途中、富忠の伏兵の攻撃を受け流れ矢にあたり、この傷が元で亡くなってしまします。

安部貞任の登場と

『黄海（きのみ）の戦い』

父・頼時の死後も安部氏は降伏することなく、むしろ後を継いだ嫡男・安部貞任（あべ

のさだとう）は以前にも増して激しく抗戦。天喜五年（1057）九月、頼義は朝廷に安倍頼時の戦死を報告し、そして、援軍と兵糧の支援を要請しますが、朝廷からは何ら支援の報せはありません。

朝廷の支援の無いまま、天喜五年（1057）十一月、東北の厳しい冬の状態を計算に入れず頼義は、多賀城の国府軍一八〇〇余を率いて出陣します。

これに対しての安部貞任軍は、藤原経清軍と合わせ四〇〇〇の兵を率い、陸奥国・黄海（きのみ）現在の岩手県一関市）で「黄海の戦い」が始まります。

頼義軍は厳しい雪の荒れささぶ寒さと兵糧の不足もあり、また、安部・藤原軍の地の利を生かした戦には、多くの名だたる家臣を失うなど悲惨なまでの軍の大半を失う大敗を喫してしまふ。

大将の頼義も戦死の誤報が流れるなどであつたが、嫡男・源義家（その時十八歳）の活躍で、家臣六名と九死に一生を得て戦場より脱出に成功します。

その後、勝利した安部・藤原経清軍は益々勢力を伸ばし、奥六郷以南にも進出し、朝廷

の赤札に代わって、藤原経清の白札で「税」を徴収することによって、安部軍は財を蓄え、奥六郷は安倍・藤原王国の状態で推移していきます。

清原氏の参戦

「黄海の戦い」で九死に一生を得た頼義は、その大敗によって受けた損害は甚大で、その後の数年間は、朝廷よりの恩賞の無いまま、ひたすら兵力の回復を図っていたのですが、安部・藤原軍に対しての軍事行動は起こせない程弱体化していた。

無為な時間を過ごした頼義は、康平五年（1062）陸奥守の任期が切れ、後任には公家・高階経重（たかしなのつねしげ）が着任してきた。しかし、郡司たちは経重に従うもの僅かで源頼義に従う者ばかりでした。

経重は何もできず帰洛することとなり、京に帰還し陸奥守を解任されてしまふ。

そこで、朝廷は、ようやく東北地方（奥六郷）の従属させることの難しさを感じ取り、再度、源頼義を陸奥守に任ずることとなり、朝廷も頼義に協力体制をとるようになってきた。

頼義は兵力増強のため、朝廷に働きかけ隣国の「出羽国」の国守・源齊頼に援軍の派遣を求めた。

そして、出羽に勢力を張る清原氏の当主・「清原光頼」きよはらみつより」にも朝廷の命を伝え、「珍奇な贈物」を贈り続け援軍要請をしていきます。

ついに、清原氏は康平五年（1062）八月、弟の「清原武則（きよはらたけのり）」を惣領代理として一万の大軍をもって頼義のもとに出仕させることになります。

これにより、頼義軍は国府軍三千の兵と合わせ一万三千の官軍となり、安部・藤原軍に対し大規模な軍事作戦を行っていくことが可能となりました。

頼義の攻勢

冬の戦いで辛酸を舐めた頼義は、清原軍の参入により、安部・藤原軍への攻撃を夏場決着と目論みます。早速八月十七日には、安部貞任の弟・安部宗任の籠る「小松柵」を攻め落とし進軍。九月に入り、安部貞任の壮絶な反撃に合うが、嫡男・義家と義綱の活躍でこれを撃退。

頼義は一気に攻め上がり、衣川関は火攻めで安部軍を混乱させ、安部軍の有力な武将を戦死に追いやってしまう。そして、一気に頼義軍は、この段で優位に立っていきます。

この勢いは、安部軍の最期の砦・厨川柵（くりやがわのさく）の戦いとなっていきます。両軍壮絶な戦いとなりますが、頼義は近隣の村々から材木や藁を集め、厨川柵を火攻め落させてしまう。

結果は、頼義軍の大勝利となり、一方の安部貞任は深手を負い、戦いの終わり近くには無念の最期を遂げていきます。一方の藤原経清は捕縛され頼義の面前に引き出される。頼義は積年の恨みの籠った経清を最も残酷な「錆びた鋸（のこぎり）」で大苦痛の挽（ひ）き殺しの刑に処するのです。

『安部氏』の滅亡と

『前九年の役』終焉

奥六郷の覇者・安部一族と在庁官人から土着した藤原経清と鎮守府將軍であり陸奥守・源頼義・義家の戦いは、「鬼切部の戦い」(1051)から始まり、出羽国清原氏の参戦による壮絶

な「厨川柵の戦い」の約十二年間の長きにわたる戦いは、ここで終焉を見るのです。

康平六年(1065)二月、頼義は、貞任、経清の首を掲げて京の都に凱旋しました。これにより、ようやく朝廷より叙目が行われ、頼義は正四位下伊予守に任じられ、嫡男の義家も従五位下出羽守に任じられ、また、清原武則も従五位上に叙され、鎮守府將軍にも補任されるなど恩賞を賜ったのです。

清原家の抬頭

奥六郷の盟主・安部貞任と藤原経清を源頼義へ援軍出動させ勝利した結果、一躍、清原武則は鎮守府將軍に補任され、さらに奥六郷と出羽国の広大な東北の地の統治を任じられるのです。

この時、錆びた鋸で処刑された藤原経清の妻・有加一乃末陪（ありかいちのまえ）を、嫡男の清原武貞（きよはらのたけさだ）の正室として迎え入れるのですが、経清の遺児・清衡（七歳）も連れていくのです。

清衡は危うく斬首となる処を助けられ、さらに、武貞の養子となって「清原清衡（きよ

はらのきよひら）」を名乗り、これが後には藤原清衡と改名し、奥州藤原の祖となる人物となるのですが、この時には、清原一族の仲間になっていくのです

そして、この清原家の複雑な人間関係の中に幼少時から地獄を幾回も見るとような内紛に翻弄されながらも、しぶとく生き延び、これが奥州藤原王国誕生を誕生させ仏国土造営の端緒となるのです。

源義家の陸奥守就任

奥六郷と出羽国を合わせた東北地方を任された清原家は、安部一族を打ち砕いた当主・清原武則からの当主は「武貞」に移っていきます。

清原武貞には前妻の嫡男・清原真衡（きよはらのさねひら）が居り、この状況の中に清衡が養子となっていくのです。

さらに当主・武貞と有加一乃末陪との間には「清原家衡（いえひら）」が誕生することになります。これがまた、先々の内紛の種となっていくのです。

当主・武貞が亡くなり、次の当主に嫡男の清原真衡が就任します。奥六郷の統治者の代

替わりの中、永保三年（1083）の秋、清原家の統治を任されている陸奥国に、過って生死の戦いの場を経験した「源義家」が陸奥守を拝命し多賀城に赴任してきます。

清原家当主の清原真衡は義家を三日間にわたり多賀城で歓待しもてなします。

清原家の内紛

当主に清原真衡が就任しますが、真衡には嫡男が生まれなかったため、海道小太郎という平氏血縁の者を養子に迎え入れ、これを「清原成衡」と名乗らせます。

更に真衡は、成衡の嫁に常陸国から源頼義の娘とされる女性を永保年間（1081-83年）に迎えることになります。

そして、この両者の婚礼の際、陸奥の真衡の館に、出羽から駆け付けた真衡の叔父（清原武貞の弟）の「吉彦秀武」が、祝いの席にと「朱塗りの盆」に「砂金」を盛り上げ参上しましたが、真衡は囲碁に夢中となり無視してしまうのです。

この行為に面目を潰された秀武は大いに怒り、砂金を庭にばらまき出羽に帰っていつてしまいました。

真衡は秀武の一連の行為を聞き、直ちに秀武の討伐を決意し軍を起こした。

『源義家の介入と

清原真衡の急死』

真衡の秀武討伐の報を受けた秀武は、逆に日頃から真衡と不仲と噂をされている「家衡」と「清衡」に兵の蜂起を促し味方するよう密使を送った。

両人は秀武に呼応し、兵を進め真衡の館を攻めた。しかし、真衡不在の館は、源義家の国府軍に守られ、家衡・清衡連合軍は撃退され大敗を喫し、国府に降伏させられてしまう。ところが、秀武討伐に向かっていた真衡は進軍中に病のために急死するという意外な事態に陥ってしまいます。

清衡と家衡の抗争

この事態に陸奥守源義家は、真衡の統治していた奥六郷を3郡ずつ、清原清衡と家衡に分与し兩人にそれぞれ統治させることを裁定するのです。

ところが、この裁定に不満を募らせた「家

衡」は、応徳三年（1086）に「清衡」の館を急襲し、清衡の妻子一族をすべて殺してしまいう事件を起こしてしまうのです。

辛うじて生き延びた清衡は国府にたどりつき、陸奥守源義家に家衡の暴挙を訴え出ました。源義家は清衡の訴えを認め、家衡の討伐を決定し助力を約束するのです。

義家・清衡軍は沼柵（秋田県横手市雄物川町沼柵）に陣取った家衡を攻撃したが、季節は冬のためと攻撃の準備不足も重なり、義家・清衡軍は大敗してしまふのです。

勝利した家衡軍は、さらに防御が強固な「金沢柵」へと移動し、防御態勢を固め勢力拡大をさせていくことを目論みます。

寛治元年（1087）義家・清衡軍再び家衡の籠る「金沢柵」を攻めるも、なかなか落とすことができなかった。そんな中、吉彦秀武も援軍として駆け付け、兵糧攻めを提案する。

兵糧攻めされた金沢柵から、飢餓に苦しむ女子供が投降してくる。義家は、最初はこれを許していたが、戦況の長引くことを避け皆殺しにしてい。この行為に怖れて投降者の

いなくなった柵内の糧食が急速に尽きていくことを恐怖した家衡は金沢柵に火を放ち敗走する。家衡は下人に身をやつし逃亡を図ったが、見破られ誅殺されてしまうのです。

『藤原清衡

奥州藤原家の祖』

陸奥守源義家の助力と吉彦秀武の策略により、清衡は異父兄弟の家衡を死に追いやり、源義家の裁定により、いよいよ奥六郷の勢力者となっていく。

そして、「清原」の名から、父の藤原経清の姓をいただき「藤原清衡」を名乗ることになっていきます。

ここで奥州藤原王国の祖となるのです。時に、寛治元年（1087）清衡三十二才のことであります。

清衡は本拠地を江刺郡豊田館に構え勢力の拡大を図る一方、寛治五年（1091）には関白藤原師実（もろざね）に貢馬するなど、京の藤原氏と交友を深めることに努め、寛治八年（1094）には奥六郷の押領使（おうりょうし＝軍事統率者）を拝命し、着々と奥州の統

治者としての地位を固めていくのです。

平泉の造営

嘉保年中（1094-95）頃には豊田館から衣川を南に越えて、磐井郡平泉に移し、政治文化の中心都市の壮大な建設に着手し、中国宋王朝や北方貿易にも勢力を拡大させてゆく。

七歳の幼少時には、父・藤原経清の過酷なまでの残忍な処刑を目の当たりにし、辛くも母の嫁ぎ先に養子の身となり、成人し一家を構えてから、異父兄弟の家衡による妻子眷属を殺されるという凄惨極まりない道を歩んできた清衡は、争いのない仏国土の政治体制を目指し、まず敵味方の霊を鎮めるばかりでなく獣や鳥など犠牲になったすべての霊を慰め、極楽浄土に導いていこうとする大伽藍の建設に着手していくのです。

その規模は寺塔四十余、僧坊は三百余に及んだと寺伝は伝えていきます。そして時代を経ても燦然と輝く「金色堂」は創建当時の栄華を今に伝えているのです。

このように奥州藤原王国四代百年の栄華の基礎を築いたのが「藤原清衡」なのです。

二代藤原基衡の政治力

大治三年（1128）父・清衡の死に伴い、家督相続の争いが起こり、異母兄・藤原惟常（これつね）を死に追いやり、基衡は二代当主となっていく。そして内乱終結に基衡を支えてきた「信夫佐藤氏」など臣下とし軍事力も次第に備わってきた。

康治元年（1132）陸奥守藤原師綱との間に争いを起こし、大切な臣下を失ったことなどから、朝廷には逆らわず恭順することを選択していきます。

次に後白河天皇近臣の「藤原基成」が陸奥守に就任下向してくると、これには早々と臣従し、やがて三代当主となる嫡子・藤原秀衡に基成の娘を正妻として迎え入れることを画策し実現させるのです。このことが、朝廷とのつながりをより深くしていくのです。

久安六年（1150）から久寿三年（1156）にかけて亡き父・清衡の浄土思想を引き継ぎ、毛越寺や無量光院など大伽藍、仏塔、庭園などが整然と平安京を模した仏塔を造立していきます。

そして、その祝いの品は豪華なものをしつ
らえ、都人を驚かせ、貢馬、アザラシの毛皮
などを献上し、その財力を誇示し、ますます
朝廷との関係を深めて奥州藤原王国を安定
させていくのです。

三代藤原秀衡

保元二年（1157）、政治力の濃い父・基衡の
死去に伴い奥州藤原王国の当主に嫡子・藤原
秀衡が継承することになります。

引き続き官位も押領使に朝廷より補任さ
れ、秀衡は出羽国、陸奥国の軍事・警察の権
限を有することになり、諸郡の郡司を主体に
した武士団十七万騎を統率する北方の王者
となっていくのです。さらに、鎮守府將軍に
も叙任されていきます

そして、都では「保元の乱」と二年後に始
まる「平治の乱」の乱の時代となり、鎌
倉で頼朝が平家打倒を目指し挙兵した時に、
平清盛からは平家への援軍の要請もあった
が、その要請には一切応ずることのない揺る
ぎなき奥州藤原王国が築かれているのです。

都では、延久四年（1073）践祚された第七
十二代白河天皇は、北面の武士を創設し自ら
の護衛団として武士団を重用し藤原摂関家
より政権運営の奪還を目指します。

そして、矢継ぎ早に天皇から上皇、そして
法皇となり藤原摂関家より権力を天皇家に
移し「白河法皇の院政」が始まります“

“治天の君”と称され絶大な権力を掌握して
いたが、後を継いだ鳥羽院と崇徳院が皇位を
争う事態となり、ここに保元の乱が勃発。鳥
羽院の流れの「後白河天皇」が皇位に就くの
ですが、政治体制は「平清盛」派に対し「藤
原信頼・源義朝」派の覇権争いが始まります。

この時、源義朝と組んでいた「藤原信頼」
の兄・「藤原基成」は陸奥守を拝命し、奥州藤
原王国に赴任しており、王国の覇者藤原秀衡
へ、我が娘を嫁がせていたのであった。

「弟・藤原信頼」が源義朝と平治元年
（1159）、平清盛の打倒に立ち上がった。

しかし、この戦いの勝者は「平清盛」であり、
敗者は「藤原信頼・源義朝」となった。

結果、源義朝の嫡子源頼朝は伊豆に、弟・
希義は土佐に配流され。絶世の美女と伝えら

れる義朝の妻妾・常磐御前には生まれたばか
りの「牛若」が残されることになるのです。
一方、首謀者の一人・藤原信頼は公卿であ
りながら、六条河原で斬首されてしまうので
す。

そして、陸奥守在任中の兄・藤原基成にも
弟の罪科が及び陸奥守の叙任を解任されて
しまいます。

しかし、基成は、その後奥州藤原王国の平
泉に留まり、秀衡の顧問格として活躍してい
くのですが、この蜘蛛の糸のような人間関係
の中に、絶世の美女牛若の母・常磐御前が嫁
いでいく「一条長成」が藤原基成と姻戚関係
として存在しているのです。

これから展開する「源義経」が、何故、最
初は京・鞍馬から、二度目には頼朝に追われ
ながら奥州藤原王国への入国を果たせたの
か、母・常磐御前がその栄枯盛衰にも大きく
関わっています。

以上の壮絶な世界の中から奥州藤原王国
は創立し、そして、栄華を極めた証人の「中
尊寺・金色堂」は、平泉の深い森の中に静か
に永遠に燦然と耀き続け、これからもこの物
語は語り継がれていくことでしょう。

【続き】

【源義経物語】

「保元の乱」

平安時代の後期、天皇家の後継天皇の問題や藤原摂関家の、これまた当主継承の問題で大きく京の都は揺れ動いていた。

その原因は遠く、平城京から平安京に遷都した第五十代桓武天皇まで遡（さかのぼ）らなければならぬ、

乙巳の乱（859）に中大兄皇子に協力し、蘇我氏を滅ぼした藤原鎌足の二代目・藤原不比等は天皇家に娘を后として送り込み、天皇家の外戚としての地位を着々と朝廷内に堅め、その権力を掌握するようになってきた。

不比等の子・藤原種継は桓武天皇に仕え、平安京への遷都を仕切るようになり、このあたりから藤原摂関家としての地位が始まっていくようになります。

そして、娘を后とし、天皇家に幼帝が誕生すれば、幼くして踐祚させ、幼帝の後見人としての権力構造を作り上げてきた。この摂関

政治の構造が約二百五十年間続いた「藤原頼道」の時代が、平等院を創建（1053）をするように我が世の春を謳歌していた。一方、奥州では前九年合戦（939）が始まっています。しかし、ここで藤原家の后からは女帝ばかりの誕生で幼帝はできなかった。このことが第七十一代後三条天皇は藤原家と血筋のつながらない天皇となり、後三条天皇は藤原摂関家を排し、天皇親政を目指すこととなります。しかし、残念ながら心半ばで崩御してしまします。

この後を継いだ第七十二代白河天皇が、先帝の意思を継ぎ藤原摂関家からの権力奪取を実行していくのです。

白河天皇は、藤原政権を見習って、自らの幼帝を天皇に踐祚させ、上皇となり、さらに法皇の御位となり、朝廷政治を我物としていきます。さらに后がお隠れになったのを機会に孫のような「待賢門院」を寵愛します。

そして、天皇の位は皇太子の堀河天皇としますが、堀河天皇は先に崩御してしまいます。

そこで、四才になる孫を「鳥羽天皇」として即位させるのです。一六才（一二歳）になられた時、白河法皇の寵愛をうけた待賢門院を

后として興入れさせるのです。

そして、翌年元永二年（一一九）には、後に崇徳天皇となる顕仁親王が生まれます。しかし、この顕仁親王を鳥羽天皇が徹底的にきらいます。

鳥羽天皇は白河法皇の差配で「上皇」にさせられ、崇徳天皇が誕生します。しかし、その白河法皇は崩御されます。その時、嫌悪感が爆発し、崇徳天皇を、すぐさま上皇に祭り上げ、自らの「院政」を開始します。崇徳上皇の血筋を絶やす行動なのです。そのような状況のなかで、鳥羽法皇は崩御していきます。

これをチャンスと捉えた崇徳上皇は、自らの天皇親政を目論見、鳥羽法皇亡き後の政権を目指し、武士を募り政権奪取に立ち上がります。

これに対し亡き鳥羽法皇陣営は、急遽「後白河天皇」を踐祚させ対抗します。この対立が武力衝突となって戦いとなった歴史が「保元の乱」であります。

戦の結果は、後白河天皇を擁した「平清盛」と「源義朝」軍の勝利となり、崇徳上皇軍に味方した義朝の父・源為義など処刑され、逃げた為朝は捕らえられ伊豆大島に流され、崇

徳上皇は讃岐に流され、その地で崩御されていくのです。

「平治の乱」

保元の乱を制した「平清盛」は臨時的に踐祚させた後白河天皇を「上皇」に祭り上げ、十五歳の「二条天皇」を誕生(1158)させます。この複雑な関係に辣腕を振るったのが下級貴族の藤原通憲「信西」です。

信西は、天皇の御位に就く教育をされなかった「後白河上皇」の信認を得て知力を発揮し平清盛の財力、武力にも接近し、そして、清盛のライバル「源義朝」を少しずつ遠ざけていきます。

源義朝は清盛と一緒にあって朝廷政権を守り通した自負がありますが、父・為義は処刑され一族を壊滅に追い込まれ、さらに清盛との恩賞の差も大きく水を開けられるという冷遇も受け、次第に朝廷政治を陰で操る信西と清盛には、大いに不満を持つようになっていった。

一方、貴族社会の後白河上皇に寵愛されていた「藤原信頼」も信西により、上皇との関係を遠ざけられてきた。あまりの信西の辣腕

政治は、貴族社会の中にも改革を求められ、藤原摂関家は疎外される状態になってきた。

平治元年(1159)十二月九日清盛は一門を伴って熊野詣でに出かけた。これをチャンスと捉えた「藤原信頼」は不満の塊・源義朝の武力を頼り、後白河上皇を法性寺に幽閉、二条天皇を擁してクーデターを成功させた。その時、信西一族は一掃されてしまう。

この政変の知らせは、熊野詣の清盛には早馬で、十三日には報告された。急遽、六波羅に帰った清盛は衝突の気配をみせず、隠密裏に、後白河上皇と二条天皇を六波羅に奪い返してしまふ。そして、「信頼・義朝」軍を朝敵とみなし一斉に攻撃を仕掛けます。

「信頼」捕らえられ、公卿ではありえない六条河原で斬首されます。「義朝」は一族をかけて奮戦するも、敗れ敗走途次暗殺されます。長男・義平は清盛を狙うが逆襲され憤死、次男・朝長は戦いで傷つき苦しみの中父・義朝に斬られ、三男・頼朝は、この時初陣を飾るも雪降る中、東国を目指すが捕らえられ翌年・伊豆に流刑とされ、弟の希義も土佐に流されて、ここで源氏は壊滅し、「平家」にあらず

んば・・・という武家政権の勃興ともいえる「清盛と後白河上皇」の時代となっていくのです。

「義経の誕生」

平治の乱の最中、源氏の棟梁・頼朝の愛妾・「常磐御前」は乳飲み子を抱き、手には二人の子供を連れて、奈良の宇陀に逃れた。

しかし、都から母親が娘と孫の行方を厳しく問われているという知らせが届いてきた。そこで、これまで仕えてきた九条院(近衛天皇の中宮・藤原呈子)に戻り、三人の子ども「今若」「乙若」「牛若」と共に清盛の沙汰の覚悟に委ねることに決めたのです。

「常磐御前」の史実は定かではありませんが、九条院が雑仕女を募ったとき、千人の応募があったという。その千人のなかから選ばれた「常磐御前」は絶世の美女であったという。

近衛天皇は鳥羽法皇の第九子で、その中宮となられた「藤原呈子」に仕えていた「常磐御前」は、鳥羽院の護衛を務めていた武勇の誉れの高い「源義朝」に出会い、ここで見染め

られ「牛若」が誕生していくのです。

「清盛の沙汰」

清盛の下に出頭した「常磐御前」は、当然、中宮・藤原呈子の口添えもあったと推察されるのですが、我が子の命乞いを、わが身を投げ出して訴えます。あまりの美貌の常磐御前に清盛も気を許し、「今若」を醍醐寺、「乙若」は「園城寺」に預ける沙汰を下し、「牛若」はまだ乳飲み子のため、母の「常磐御前」と清盛のもとに留まり、しばらくは清盛の愛妾となっていくのです。

「牛若」は、このような状況下で清盛と接しているので、幼少の頃は清盛を父と思い込んで不思議でない世界に住んでいたのです。間もなく清盛と常磐御前に女子が生まれます。これが正妻・「平時子」に知らえてしまいます。

清盛は、常磐御前を大蔵卿の「一条良成」に嫁がせ、ここで無罪放免とするのです。

「牛若」も母と一緒に一条家に移ります。そして、母と一条良成との間に男子が生まれます。この子（能成）は幼くして、従五位下の官位に允許され。貴族社会への道を進んで

いくのに対し、九歳になった牛若の預け先を母・常磐御前は決意します。

「鞍馬寺へ」

牛若が鞍馬寺へ入寺した経緯については、洛北・鞍馬寺の別当である東光坊阿闍梨が亡き「義朝」の祈りの師であったことを、母常磐御前は知っていた。その故、常磐は牛若を預かってくれるようお願い出て、牛若の身を委ねるのです。東光坊は義朝の御曹子なら喜んで寺に迎え入れたというのです。

鞍馬寺の本尊の毘沙門天は、平安京の北の守護神と崇められ、この毘沙門天は戦いの神であることから武将の信仰が篤く、また、「鬼一法眼（きいちほうげん）」という陰陽師に由来する「鬼一法眼虎の巻」という兵法書が存在し、武田信玄などは、この書を求め毎年多くの土産を送っていたという

鞍馬寺への武将の信仰は平安時代初期からあり、史実に基づくならば、秀郷流藤原氏の藤原季清（すえきよ）は「西行」となった佐藤義清（のりきよ）の祖父であるが白河院

政期に検非違使として活躍する武士ですが、相伝の地紀伊国名草軍名手郷（和歌山県紀の川市）に「紀伊国堂」を建立した時、鞍馬寺に帰依していたので、本尊を真似て毘沙門天としたという。

また、奥州平泉町にある「達谷窟・たっこくのいわや」は、坂上田村麻呂が窟前に九間四面の精舎を建て。鞍馬寺を模して多聞天像を安置したという。

このように軍神としての毘沙門天信仰は平安時代以前から見られるように、常磐御前の夫・源義朝もまた鞍馬寺に帰依し、その祈禱師を祈りの師としていたのである。父を知らない牛若を、義朝ゆかりの、武将の信仰の篤い寺に入寺をお願いしたのは、夫義朝のような武勇の優れた武将を牛若に願っていたのかもしれない。

「遮那王を名乗る」

鞍馬へ入った遮那王は、ここで初めて父義朝の仇は平清盛であると知り愕然とする。

それ故か、遮那王、剃髪せず鞍馬の山を駆け巡って、平家打倒を目指した剣術の修行に

励んで、戦闘における身体能力をつけていたのではないかという。

伝説では天狗から剣の極意を伝授され、都の五条大橋で刀狩りの猛威を奮っていた「武蔵坊弁慶」とも出逢い、そして橋上で戦い破り、終生家臣として従属させていくということになります。

この弁慶は、また、山岳修行の風水に長けた祈禱師、陰陽師も兼ねていたのではないだろうか。中国の歴史を垣間見るに、戦場には必ず。天体の流れ、風の流れ、潮の満ち引きなどを計算された軍師の存在が大きい。鎌倉時代に於いても、源頼朝は平家打倒に挙兵した時にも、占いによって決められたという。

また、鬼一法眼が秘蔵する「六韜三略・りくとうさんりやく」を、法眼の娘を通じて学んだということが義経記に書かれていると言いますが、この兵法書は、中国・周時代（紀元前千年～四百年前）の「太公望呂尚」（たいこうぼうろしやう）が著した六巻から成り、この中の四巻目の「虎の巻」が特に、後の源平合戦の戦略と戦術に活用されたのとはと推考されています。

「遮那王の脱出」

遮那王十六才になりました。この年齢になると平家から何らかの新しい処断が下されるかもしれない。ましてや、剃髪せず鞍馬の険しい山中を修行していることが知られたらどのような沙汰が下るかもしれません。

母の常盤御前は、夫・義朝の再来を願って鞍馬寺の東光坊阿闍梨に預けたが、遮那王を鞍馬から逃亡させることを画策する。

この逃亡劇は、常磐が鞍馬寺へ預ける時、既に東光坊阿闍梨に綿密に相談し、その時が来たならば奥州藤原王国へというシナリオができあがっていたのではないかとしか考えられないのです。

すでに母の常盤御前は入寺の時からの上算上かもしれないが、再嫁した「一条良成」の係累を辿ると、奥州藤原王国の当主・藤原秀衡に辿り付くことでした。

さらに、「平治の乱」で夫義朝と組した「藤原信頼」の兄「藤原基成」が秀衡の岳父として奥州藤原王国に健在なのです。

承安四年（一二七四）、十六才となった遮那王は綿密な計画のもと、「陵介重頼」（みさぎのすけしげより）の手引きで鞍馬を脱し、奥州藤原家の御用商人の金売り吉次信高と同道して奥州藤原王国に下っていくのです。

当時、吉次のような金商人は、摂関家や院の厩舎人（きゆうしやびと）ともいわれており、日宋貿易や造寺造仏が盛んであったことから、金の需要が増え、商人たちは頻繁に京都と奥州を行き来していたと思われ、身を窶（やつ）した遮那王は、その御用商人吉次信高と同道することで怪しまれず容易く脱出できたのであります。

「元服し

義経となる」

遮那王は奥州下向の時、京都を早朝発った最初の宿場の近江国鏡宿（滋賀県竜王町）で元服の儀式を烏帽子親もなく「自分一人」で果敢に行うのです。

元服の時には、烏帽子親の一字を頂ぎ改名に使われる場合が多いのですが、事前に考えて準備をしていたと思われる「源氏一族」の通字の「義」を父義朝からいただくこととし

た。「経」は源氏の姓の初代「経基王」からか、これから向かう奥州藤原王国の初代・藤原清衡の父・亘理権大夫（わたりのごんのだいふ）藤原経清の一字をいただいたのではないかと考えるのであります。

それは、奥州藤原王国物語にも書きましたが、前九年の役で奥六郷を支配していた安部貞任と源頼義が率いる官軍と交戦した際、妻の実家である安部軍にいた経清は、康平五年（1063）九月十七日の厨川（くりやがわ）の戦いに敗れ、頼義によって惨殺されてしまっています。

その時。経清の妻（安部貞任の妹）は、七才の清衡を連れて、出羽の俘囚清原武則に再嫁して、後に家衡を産む。清衡は清原姓となり清原清衡として育つのである。

義経の育った環境は、この清衡の境遇と酷似する。そのことも学習していたのか、「経」の一字は。この強靱な藤原経清からいただいたと考えても不思議ではないと思えるのです。

「最初の平泉」

周到に計画された義経の奥州藤原王国入

りは、当主・藤原秀衡に歓迎され、母常盤御前の夫・一条長成の親族・前陸奥守「藤原基成」の屋敷地に住まいすることになった。

史書には、義経の平泉入りした後の動静については一切書かれていないが、この項は周りの状況からの推測で書くことをお許し願いたい。

後白河上皇の近臣の藤原範季（のりすえ）は、安元三年（1173）正月、陸奥守に就任し、三月二十日には鎮守府将軍にも任命され、猶子の下野守範光を同道し奥州に下ってきた。

平泉では、前鎮守府将軍・藤原秀衡、また、前陸奥守の藤原基成が居り、この新陸奥守兼鎮守府将軍の就任を祝うことになり、その席には当然、義経も出席していたことであろう。また、この「範季」は、義経の異母兄となる「源範頼（のりより）」の養父にもなっており、義経が在京中には在京活動を助け、義経の逃亡中にも援助をしていると思われる。

また、奥州藤原氏はアザラシの毛皮、中国の陶器などの交易もみられ、当然そこには、中国の兵法書も輸入され、義経は平家打倒を勉強していたことは想像できる。

そして奥州は馬の産地であり、騎射術の鍛錬にも打ち込み、これが義経の持つ、鞍馬で培った優れた身体能力と騎射術、鬼一法眼の虎の巻、奥州藤原家の兵法書の知識、そして、風水に長けた弁慶の存在も、これから始まる源平合戦に華々しく開花していくのである。

「頼朝の蜂起」

「平家にあらずんば人にあらず」と豪語する平家に対し、果敢に令旨を掲げ戦いを挑んだ「以仁王」に呼応した源頼朝は、伊豆の二十年にわたる流刑に決別し、治承四年（1184）八月石橋山で平家打倒に立ち上がった。

しかし、平家方の大庭景親、伊東祐親の軍勢に圧倒され、梶原景時の見逃しもあったが大敗し、真鶴岬から房総へ逃げわたる。

房総の地で、三浦義澄、千葉常胤、上総介広常を従えた頼朝は、十月には平家の豪族を蹴散らし鎌倉は大倉の地に幕府の芽生えを創るのです。

平家の御大・平清盛は激怒し、平敦盛を総大将として二万の討伐軍を、鎌倉に向かわせる。頼朝富士川の黄瀬川宿に陣を張り、維盛軍と対峙する。

「九朗義経の登場」

治承四年（一一八四）八月、兄・頼朝が平家打倒に立ち上がったという情報が平泉にも届く。義経、すぐさま馳せ参ずることの許しを秀衡に問う。秀衡は奥州藤原王国をさらに強固なものとしていくためには、義経の成長が必要と期待をかけていたので固辞する。

しかし、義経の平家打倒の信念が固く、それには秀衡も渋々承知せざるを得なくなつた。そして、藤原家の猛将・佐藤嗣信と忠信の兄弟を義経の許に参陣させ、軍勢八十五騎として鎌倉へ発信させるのです。

義経軍団、奥州街道を走りに走り、十月二十一日には、富士川で平家維盛軍二万と対峙する頼朝の陣屋の「黄瀬川宿」に到着。

義経の面通しには時間がかかったが、涙の対面となっていく。義経は産まれて以来肉親との対面はなく、鞍馬の山の孤独な日々が脳裏をかすめたのか、兄・頼朝に逢えたのが嬉しく感極まり嗚咽を止めることができなかった。兄・頼朝も涙をおさえていたという。

対峙した維盛平家軍二万の軍勢は、富士川に羽を休めていた数万羽の渡り鳥の飛び立つ羽音の大きさに驚き一斉に退散していった。頼朝戦わずして勝ち上がり、義経を同道し鎌倉へ凱旋するのです。

「木曾義仲の蜂起」

以仁王の令旨は源行家が源氏に関わる武將に伝え平家打倒を促します。それにいち早く呼応したのが「木曾義仲」です。

義仲は頼朝の父・義朝の弟・源義賢（みなもとのかよしかた）の嫡子ですが、父は兄義朝の長男・源義平に領土争いに負け誅されてしまします。その時に乱から逃れ、木曾の山中で育てられ力をつけ木曾義仲と成長していました。

平家打倒に呼応した義仲。瞬く間に北陸地方の平家を駆逐します。この義仲と頼朝の「平家打倒」の狼煙（のろし）は、清盛に大ショックを与えたのか、清盛は熱病にうなされ、当主となる平宗盛に「自分の供養はいらぬ。唯一つ、頼朝の首を我が墓前に供えよ！」と言い残し治承五年三月、六十三才で亡くなります。これが平家衰退を一気に加速させて

いきます。

義仲は、宗盛が討伐に向かわせた維盛軍十万を倶利伽羅峠で敗走させ、勢いに乗じて京の都になだれ込みます。

義仲、朝廷の儀式礼節をわきまえず、後白河法皇に疎んじられ、兵糧の準備もないまま翻弄され弱体化していきます。

これを見た後白河法皇は、密かに、鎌倉の頼朝に義仲排除の宣旨を下すのです。

「義経の参戦」

義仲討伐の宣旨を賜った頼朝、討伐軍総大將に「源範頼」を瀬田の唐橋から、搦手將軍を「義経」伊勢に三ヶ月滞在し都の地形や義仲の動静、また、都を奪還しようとする平家の情勢を入念に調べてから、宇治川を渡河し京の義仲を誅殺してしまふ。ここで、世にいう「宇治川の先陣争いの物語」が生まれるのですが、それはまた、別に機会にしましょう。

勝利を成し遂げた源範頼は鎌倉へ凱旋。一方の義経は京に留まり、都の安全快復と朝廷の警護を頼朝から命じられるのです。

この時の義経は検非違使にも優る活躍を見せ、後白河法皇の目に留まったことは言う

までもありません。

義仲により都落ちを余儀なくされた安德天皇（三種の神器を奉戴）を擁する平家は、今にも都の奪還ができるようにと力をつけ、本拠地「彦島」から福原（神戸）と屋島（高松）に続々と上って陣屋を構築してきています。これに驚いた後白河法皇は、今度もまた、源頼朝へ「平家討滅」宣旨を下します。

その時の義経は、入洛前伊勢に陣を張っていた際に三ヶ月かけ都の情勢、平家の状況を把握していたので、義仲を殺めてから二週間の滞在でもすぐ出陣できた。その後は約一ヶ月をかけ、平家の動静、規模、陣屋の地形、兵糧の確保などを地元の漁師や山の猟師を慰撫し味方として家人に取り立てながら、平家の攻略方法を綿密に準備していたようです。

「義経の戦法」

義経の戦いの最大の特徴は、「少数精鋭の奇襲作戦」と捉えます。平家の拠点であった一の谷や屋島は、背後に難攻不落の崖があり、正面からの攻撃では難しいところを予想もできない背後から七十〜八十騎の攻撃で相

手を混乱させ自滅に追い込んでしまう。自軍の犠牲は少ないようにする。これが義経の最大の戦略であった。例えば、一に谷の逆落としや屋島の戦いでそれが実行され勝利に導いていく。

また、少人数で攻撃するため、大軍にみせかけるために、屋島の戦いでは高松の民家に火をつけ、数騎ごと一塊になって群がりながら変幻自在の姿で現れ相手を拡散させてしまう。

疾風のような「快速攻撃」も武器である。丹波路を二日かかるところを一日で駆け抜け、また、摂津国渡辺から阿波国まで通常三日かかる航路を嵐の中六時間で渡りきってしまう。（この時、梶原景時と逆櫓（さかろ）論争となる）

さらに阿波から八島まで二日かかる日程を一晚で不眠不休で走りきり戦いに臨む。

また、敵を言葉巧みに調略に引き込み味方にしてしまう。義経は情報収集も非常に大事にしている。一の谷へ行く道中では猟師の鷲尾義久を阿波では近藤親家、壇ノ浦では瀬戸内海の水軍・河野道信などを協力者として重用している。

さらに屋島では、月の満ち欠けに伴う潮汐

力を利用してしている。壇ノ浦では小潮期を選び、潮流を意識して戦ったのは有名な話となっているのです。

このように義経の戦法は、弁慶の祈禱や協力者からの情報をもとに、合戦の日次や現地の地勢・風土を調べ、相手の防備や攻撃を想定し、効率的な戦略を立て、戦場では、義経自身が常に前線にいて、率先して奇襲攻撃をしかける。指揮官の果敢な戦いに接する配下の武士たちは、感動するとともに士気も高まり、団結力も倍増していくのです。

「凱旋と挫折」

文治元年（1185）三月二十四日、長門国壇ノ浦において平家一門は滅んでいく。四月四日には戦勝が京都に伝わり、鎌倉へは十一日に頼朝に報告が届いた。翌十二日には戦勝処理の評定が開かれ、「範頼」はしばらく九州に留まり、平家の領地などの調査を命じられる。義経へは、生け捕りとなった「平宗盛・宗清父子」「建礼門院」たちを連れて上洛せよと命じられ、さらに、頼朝は自身の推薦のない御家人の任官は絶対に受けないことを厳しく通達するのでした。

義経は二十五日、鎧姿で、神鏡・神璽を供奉して京都に凱旋した。翌二十六日には捕虜となった平氏の人たちが入京し、大路渡しを行った。

二十七日には義経は、院より「院御厩司」に任じられるが、これは頼朝の推薦がない官位であった、これが頼朝の勘気に触れ、後の義経の凋落の原因となっていくのです。

逆に、義経の心中は、父義朝の会稽（かいけい）の恥（過去に受けた辱）を雪ぐべく源氏再興を願い、鞍馬寺を脱出してから約十年の歳月が流れ、いまその宿願が達成されたと兄頼朝に喜んでくれるものと思いいこんだのでした。

そして、ここで後白河法皇の策略が見えてきます。義経の純粋さを利用し、検非違使の官位を授けるのです。頼朝の勘気は義経への刺客（土佐坊昌俊・とさのぼうそうしゅん）を向けることに発展します。これは、静御前の機転で、義経は、これを撃退した後白河法皇の宣旨を拝戴し、逆に頼朝追討を試みるのですが、畿内の武將に呼応をしますが、応ずるものが少なく、九州で体制を創り上げ頼朝に對抗しようと文治元年（一二八五）十一月五日大物浦（だいもつうら）から船出します。ここ

から、義経の逃避行が始まります。

「平泉と義経」

義経一行は、大物浦を船出したが、俄かに天候が急変し、壇ノ浦で沈められた怨霊のなせる業と後年言われていますが、引き返されてしまします。

義経に同行していた者は、僅か四人で源有綱、堀吉次、弁慶、静御前であった。船出に失敗した十一月五日は、渡辺党の助けを借り天王寺辺りで泊まり、方向を変え「吉野」に向かうことにした。

しかし、吉野の山は女人禁制で、ここで義経は再会を約して別れる。静御前は京に来ていた北条時政に引き出され、鎌倉に同行される。

残った義経一行には味方する社寺や反鎌倉の貴族も多く約三年間の逃避の大部分の場所は、京の都にいたのではと考えられるのです。追手の鎌倉頼朝の手になかなか落ちることはなかった。これも推測ですが、最終的に奥州藤原王国の「秀衡」がそのネットワークを使い平泉まで、義経の妻子までも迎え入れるのです。また、後白河法皇も院政の復活

を目論見、奥州藤原王国へ向かうように仕組んでいたのではなからうか。

陸奥国は平治の乱後には院の御分国もあり、陸奥からの利益も多大であった。そのうえ鎌倉に対峙できる唯一残された勢力は奥州藤原王国しかない。このようなことを推測するに、ますます後白河法皇と藤原秀衡の関係に迫ってきます。

「義経を大將軍に」

文治三年（一二八五）二月十日に長期にわたる逃避行の終着点、平泉に到着した義経家族と主従はしばらくは安穩とした生活ができたと思っていますが、それもつかの間、十月二十九日には義経の最大の後盾・藤原秀衡が他界してしまう。

秀衡は臨終の席で、長男の「国衡」と嫡男の「泰衡」が兄弟融和な関係で奥州藤原王国を守っていくような対策を施す。それは、当主を「泰衡」に継がせ、長男の「国衡」には当時の秀衡の妻を娶らせるということでした。そして各々の異心がないように「起請文」を書かせるのでした。

そして、義経を呼んで「起請文」を書かせ、

義経を主君として兄弟が仕え、「三人一味」で鎌倉に対峙していくように遺言したという。頼朝の脅威とは別に、秀衡の心配は平泉政権の後継者にも問題があったのです。

「義経の最期」

義経が奥州藤原王国にいたことが確実となった。頼朝は手始めに出羽国へ法師昌尊を遣わされたが、義経の軍兵と戦い命からがら鎌倉に逃げ帰ったことは、義経が鎌倉対策をしていることの証であると朝廷に、義経追討の宣旨を迫る。

そして、泰衡と元陸奥守・藤原基成へ「義経を捕らえ差し出す事、そうしないと義経に味方したとして征伐を下す」という内容の宣旨が発せられたのです。

頼朝の執拗な攻勢に泰衡、文治五年（1188）四月三十日（太陽暦六月十五日）の朝早く東の空が白み始める頃、泰衡の従兵数百騎は衣川館を攻めるのです。

義経の従者二十人多勢に無勢、立ち向かう弁慶、必死の形相で、最後まで主君を守るのです。義経二十二才の郷御前と娘四才を旅立たせ自らも「源九郎判官義経」の命を絶つて

いくのです。

義経、これからという「三十一才」の源氏の御曹子でありました。

「終章」

縄文時代からの争いを知らぬ蝦夷の人たちは、同じ民族でありながら、その当時の先進国である中国・唐の律令国家制度を取り入れたヤマト政権に、次第に組み入れられていくことになりました。

しかし、そのヤマト政権に入ること拒否する部族も存在し、そこに小競り合いが発生して、さらには大きな歴史に残る戦いになって平定され、そこに文化が芽生え洗練され、気持ちの癒される世界ができあがっていくのです。

このように考えますと文化は争乱の最終結晶として現れてくるのかもしれませんが。

現在の中尊寺には争いの跡などは微塵もありませんが、壮絶は争いを経て誕生した物語を一番よく知っていると思いますが、それは黙して語らず、燦然と輝くお姿には唯々畏敬の念のみが湧き上がってくるのであります。

また義経については、筆を進めていくほど、純真無垢な九郎判官義経像が強まってきました。現在は京都市内から鞍馬までは電車で行けますが、今から八百年前の道路事情は、標高四百メートルの寺域で十一才の子供が親元を離れ異次元の世界に放り込まれたも同然の世界を考えますと、どうであつたろうかと考えをめぐらすにとってもではありませんが、凡人には想像すら湧いてきません。

ここ数年、鎌倉の中世の歴史が好きで、頼朝の鎌倉殿周辺のみのことでしたが、あらためて、義経のことを調べ空想しながら思い進めてきました。その行動範囲の大きさ、身体能力の抜群さ、革新的兵法の戦略は、並大抵で出来るものではないと改めて心底感ずるものが出て参ります。

それ故に、この義経の魅力は時代の流れに洗練され、また新しい義経像が産まれ出てくるのでしょう。

ほんとうに、これからもいろいろな切り口で再生されていくことと確信します。

まだまだ分からないことだらけですが、歴史のロマンを感じながら仲間と歴史の共有ができる幸せは最高と思っています。お読みいただきありがとうございます

参考文献

- 神社神道文化検定テキスト 扶桑社
鎌倉歴史文化検定テキスト 鎌倉春秋社
ヤマトタケル 産経新聞取材班
源頼朝 高橋典幸 山川出版社
平清盛の真実 ILM出版社
古代争乱 山岸良二監修 サンエイ新書
日本史辞典 角川学芸出版
源義経と壇ノ浦 前川佳代 吉川弘文館
奥州藤原氏四代 高橋富雄 吉川弘文館
炎立つ 高橋克彦 講談社文庫
源義経 五味文彦 岩波新書
鎌倉と京 五味文彦 講談社学術文庫
PCウィキペディア

令和5年度 鎌倉楽しむ会講話会

奥州藤原王国と 源義経

古代の東北地方は、「古事記」「日本書紀」の中に垣間見られ、西暦4世紀には大和朝廷が武蔵国から九州まで勢力圏に治めている事実が古墳の発掘調査から解明されてきています。

西暦645年の「大化の改新」により朝廷の国家体制を中国の律令制度を導入し強化していった。その政策の中には「蝦夷地」を大和政権（中央政権）に組み入れることが重要となっていた。これは蝦夷地人民にとっては、自分たちの権益を大幅に侵されることとなり。中央政権に抵抗することになっていく。

これに対し中央政権は武力を以って制圧するため、多賀城を建設し、奈良時代後期（780年代）には、猛将・坂上田村麻呂の三度の征夷遠征により蝦夷地は中央政権内に収めることができていった。

しかし、西暦1000年代に入ると、俘囚長の豪族・安部氏と「前九年の役」が始まり、それが鎮圧されると「後三年の役」が始り、ここに源義家の登場により鎮圧され、これによって「藤原清衡」が奥六郷を任されることとなり「奥州藤原王国」の初代が誕生するのです。二代「藤原基衡」は中央政権の院近臣・藤原基成が陸奥守として赴任するやこれを歓迎し、その娘を三代「藤原秀衡」の正室として迎え入れ、京の公家勢力下に食い込んでいく。

そして、この藤原基成の弟・藤原信頼が、源義朝（義経の父）と組んで「平治の乱」を起こし敗れ、父義朝は敗死、源頼朝は伊豆に配流。この年誕生した「牛若」は母・常磐と清盛～一条長成～鞍馬そして「奥州藤原」と流れ成長していくのです。それぞれの流転の激しい物語を、その時代の背景と併せて講話します。また、人物の相関図が複雑ですが、分かりやすく講話していきます。

開催日時 令和5年11月22日（水）

受付 午後1時 開講 午後1時20分

講話テーマ 「奥州藤原王国と源義経」

開催場所 練馬区貫井地区区民館 tel. 03-3926-7217

（練馬区貫井1丁目7番1号中村橋区民センター内）

講話料 500円

講師 清藤 孝